

設立十周年記念式典の盛儀

来賓から称賛の言葉・黒田理事長「さらなる努力を……」

留学僧の育英事業を通して佛教の国際化と人材育成を図っている「横浜善光寺留学僧育英会」(昭和五十九年一月設立)の設立十周年記念式典が、三月三十日午前十時から、善光寺釈迦殿で挙行されました。法要導師は駒澤大学の櫻井秀雄総長、式典には韓国の三大寺刹の一つ、靈鷲叢林通度寺から老天月下方丈、定岳泰應住寺、釈梵河宝物館長の三人が来日して参列し、老天月下方丈が講演しました。これは、これまで育英会が韓国の日本留学生を育英生として採用し

てきたのに加え、黒田理事長が金襴と麻の九条袈裟と絡子、及び『正法眼蔵』九十五巻を通度寺に贈るなど佛教交流を深めてきた縁によるもので、日韓の佛教交流史に新たな意義をとどめる盛儀となりました。

記念の式典

式典は宮本延雄理事(鶴見大学学監)の司会で進められ、富永豊重監事(善光寺檀徒総代)の開式の辞で始まりしました。育英会顧問の櫻井

駒澤大学総長の導師で法要が厳修された後、櫻井総長はおおよそ次のように垂示されました。

「私も通度寺に拝登したことがあります。六四六年の開創と聞いているので、実に長い歴史をもっています。日本佛教は中国、韓国を通じて成立しました。過去においていろいろなことがありました。文祿元年（一五九二）に豊臣秀吉が釜山から攻め入った時、通度寺の伽藍は烏有に帰したそうです。

近年、佛教の国際化が言われます。キリスト教においてエキュメニカル・ムーブメントの動きが見られるほど国際化が重視されています。佛教は上座・大乘の別があつて、それが壁になっています。佛教の国際化は、戒律を生活の中に実践し、共通の佛教に生きることだと思いません。

外国からの留学僧が日本で共に佛教を研究し合うことは喜ばしいことです。善光寺育英会は

黒田住職が曹洞宗の宗旨を拡げておられるもので、黒田住職ほどの力を持った住職は曹洞宗にはいません。宗門人としてこの事業に何らかの援助をしなければならぬほどです。身の出家と心の出家が共に備わるのでなければならぬとの太祖大師（瑩山禪師）の教えを肯うならば、我々はあえて上座・大乘を分ける必要はありません。佛国土現成のために手を携えていくことを祈念します。」

この後、通度寺の老天月下方丈が講演し、黒田理事長との法縁に感謝の言葉を述べるとともに、佛教の目指す成佛について説き、また通度寺の歴史などについて話されました。（別掲）

次いで佐藤俊明常務理事が善光寺育英会十年の経過を報告し、「留学僧派遣は今年第十回を迎え、日本、韓国、中国、タイ、スリランカ、バングラデシュ、デンマークと八カ国から九人を採用し、日本、タイ、スリランカ、インドに送

ることになった。国際的になり、内容も充実してきた。この間、七年前から黒田理事長と共に関係各国へ表敬訪問の旅を続け、昨年で十カ国になったので、この日に間に合うように一冊の本ができた。十年間で派遣留学僧の数は五十七人、継続を含めると六十九人、また国籍は、日本人三十八人、外国の人三十一人となっている」と述べました。

来賓から称賛の言葉

来賓としてロサンゼルス禅センターの前角博雄主管、駒澤大学の鈴木格禪教授、善光寺檀徒総代の伊藤喜三郎氏がそれぞれ祝辞を述べました。

黒田理事長の実兄でもある前角主管は「育英会を理解し支えてくださった方々のお力と、向学心に燃え護法の念に燃えている留学僧の方々なくしてはできないことだ。たった十年間でこれ



だけの仕事をしている。『世界一花』の言葉があるが、今後も二倍、五倍の花弁をつけ、これが法の華となつて、世界中に芳しい香りをただよわせていただきたい」と励ましの言葉を贈りました。

鈴木教授は「道元禅師は五年の中国留学からお帰りになつて、『空手還郷』と言われた。当山の黒田方丈は空手にしてこの地に立たれた。普通なら何かつかもうとしてもがくが、黒田方丈は手を放ち、心を開いた。そのことが、すぐれた縁を抱くことになった。宗教は人によつて興り、人によつて滅ぶ。佛教も人により時代に生き、地上に生きる。黒田方丈は佛教の原点に立つて、真の人材を打出しようと発願された。そして檀信徒に呼びかけられた。育英会の誕生である。この会を契機として、多くの俊秀が宗旨の別、国境・国籍を超えて雲集している。大財閥がしているのではない。何も持たずにこの地

に立った空手の原点を忘れず、それに共鳴された檀家の方々により歩みを始められた。そこに黒田方丈の祈りと誓願と回向の行持、行実の真があつたからである。ロウソクは自分の身体を燃やすことによつて周りを照らす。線香は身を焼くことによつて豊かな香りを漂わせる。この会に育てられた方々は、黒田方丈の願いを願ひとし、祈りを祈りとして学問、実践の分野で表に立ち、また地の塩となつて人の世を照らす大いなる灯火となり、暗闇を救う妙香となつていきたいいただきたいと切に願う」と心をこめて祝意を表されました。

伊藤総代は「黒田方丈様との御縁は古い。結婚の仲人もし、寺を創るお手伝いもさせていだいた。夢の多い方で、育英会も、檀家の方々におかず代をけずつていただければいい、とにかくスタートすることが大切だということで始めた。方丈様の考えは、次の世代を担う立派な

宗教者を育てることだ。この偉大な仕事があった十年間でここまで来たのは奇跡のようなこと。方丈様の誇大妄想的な情熱がここまで引っ張ってきた。我々も社会に対して自慢できる。檀家の皆さんと今後もスクラムを組み、手をつないで、ロウソクの火を大きくしていきたい」と外護の情熱を披瀝しました。

通度寺と育英会の間で互いに記念品が贈呈され、祝電の披露の後、十周年の功労者として、役員を代表して佐藤常務理事、顧問を代表して檀徒総代の伊藤氏、篤志家の京浜倉庫（株）会長・大津正二氏に黒田理事長から「感謝状」が手渡されました。続いて留学僧に採用されたスリランカのサンガ・ラタナ氏に、未交付だった辞令が伝達されました。

留学僧を代表して、第五回採用の愛知学院大 学助教授・引田弘道氏、第九回採用のスリランカ僧侶キリネティヤネ・ヴィマラワンサ氏（愛

知学院大学大学院博士課程に在学中）が「育英生の言葉」を述べました。

引田氏は「育英会の素晴らしさは海外の僧侶に会えることだ。寺に育った子弟に欠けているのは、佛教をどう信仰するかということだ。

海外で生きた佛教の姿を見ることは学生にとって必要なこと。佛教は今を救う教えであるから、今を見つめることが重要と思う」と話しました。

ヴィマラワンサ氏は「黒田先生にお目にかかって、本当にお坊さんらしく大きな活動をしておられる立派な方と思った。民族・文化の違いはあるが、佛陀の教えから見るととき壁はないことが日本に来てよくわかった。奨学金のおかげで研究ができたことに感謝している。この寺にはアジアの人だけでなく、ヨーロッパの人も集まる。ここに来ると広く佛教のことを学ぶ機会が得られる。留学生は自分の国に帰った時、黒田先生のように世界のために生きることを願っ

ている」と感謝と決意の言葉を述べました。

「さらなる努力を」

黒田理事長が決意

黒田理事長は「有り難うございました。何も申し上げることはございません。さらに頑張っていくことをお誓いします」と感極まった様子で謝辞を述べ、最後に「善光寺の歌」を唱和し、



謝辞を述べる黒田理事長

越石周平護寺会長の閉式の辞で式典は終了しました。

引き続きいて釈迦殿一階に席を移して清興が催され、奈良康明理事（駒澤大学教授）が「この育英会が日本の若い方々に外国へ行く機会を与え、外国の若い方々に、日本に来る機会を与えていることは素晴らしい。黒田理事長の発願・努力を抜きにして語ることはできない。黒田理事長は自分でレールを敷き、自分で機関車になってみんなを引っ張っていく。皆さんの大きな力を総合して十周年を迎えられた。このような式典を開くことができたこと自体が発展の証だ」と挨拶しました。